低出生体重児の母親の育児負担感に対するサポートの効果

○佐藤 拓¹・高谷理恵子²・原野明子²・鶴巻正子²
(¹いわき明星大学人文学部・²福島大学人間発達文化学類)
キーワード：低出生体重児、育児負担感、サポート

Effects of social support on parenting strain in mothers of low birth weight children
Taku SATO¹, Rieko TAKAYA², Akiko HARNO² and Masako TSURUMAKI²
(¹College of Humanities, Iwaki Meisei University, ²Faculty of Human Development and Culture, Fukushima University)
Key Words: low birth weight, parenting strain, support

目 的

低出生体重児の母親は、成熟児を持つ母親よりも育児に関する不安・負担感が強いことが示されている (e. g., 山口・遠藤, 2009)。また、育児不安・負担感とサポートの知覚の間に負の関連も示されている (e. g., 渡部ら, 2006)。ただし、育児負担感に対するサポートの効果が出生体重の程度によって影響を受けるかどうかについては、これまでに直接的に検討されていない。本研究では、育児負担感に影響する他の要因を統制した上で、下記の仮説の検討を行った。

仮説 1：出生体重が 1500g 未満の超・極低出生体重児の母親は、1500g 以上の低出生体重児の母親よりも育児に関する負担を強く感じる

仮説 2a：出生体重の程度に関わりなくサポートの知覚が育児の負担感を緩和する

仮説 2b：低出生体重児の母親よりも、極・超低出生体重児の母親において育児の負担感に対するサポートの知覚の影響が大きい

方 法

調査対象 低出生体重児を持つ母親 110 名を対象とした。児の生活年齢は 27.3 ヶ月 ($SD = 12.4$) 出生体重は 1,699.8 g ($SD = 613.4$) であった。そのうち、60.4%は出生体重が 1,500g 以上 2,500 未満の低出生体重 (LBWI)、39.4%は 1,500g 未満の超・極低出生体重児 (E/VLBWI) であった。

調査内容 ①基礎的属性 児の性別、生活年齢、出生体重、在胎週数、母親の出産時の年齢、本児出産前の出産経験の有無、就労、最終学歴、妊娠時の合併症の有無、家族成員数、育児について相談可能な相手の人数 ②育児負担感 第 4 回 21 世紀出生児縦断調査 (厚生労働省大臣官房統計情報部, 2006) で用いられた項目から 13 項目を用いた。これらの項目に対して、5 件法 (1 = 全くあてはまらない ~ 5 = とてもあてはまる) で評定を求めた。

結 果 と 考 察

基本的属性の群間差 LBWI 群と E/VLBWI 群で、児の出生体重、在胎週数、妊娠時の合併症の有無のほか、本児出産前の出産経験の有無に差があり ($p < .05$)、E/VLBWI 群で出産経験のある人が多かった (VLBI 群:47.0%, E/VLBWI 群 70.5%)。

育児負担感の構造 次に、育児負担感に関する項目について因子分析 (主因子法・プロマックス回転) を実施した。その結果、固有値の減衰状況と解釈の容易さから 3 因子解が妥当であると考えられた。第 1 因子は、身体の疲れ、育児による拘束感を示す「育児による不自由さ」因子であった ($\alpha = .81$)。第 2 因子は、配偶者のサポートの不足、育児方針の不一致を示す「サポートの不十分さ」因子であった ($\alpha = .64$)。第 3 因子は、成長への懸念、児の育てにくさを示す「育児の困難さ」因子であった ($\alpha = .68$)。

階層的重回帰分析 「育児による不自由さ」と「育児の困難さ」に対する出生体重とサポート知覚の影響を検討するため、階層的重回帰分析を行った (表 1)。

「育児による不自由さ」と「育児の困難さ」の得点を従属変数として、ステップ 1 で共変量として本児出産前の出産経験を、ステップ 2 で主効果変数の出生体重 (0 = E/VLBW, 1 = LBW) とサポートの不十分さの得点を、最後にステップ 3 で出生体重とサポートの不十分さの交互作用項を回帰式に順次投入した。その結果、「育児による不自由さ」については、サポートの不十分さの主効果と交互作用が有意であった ($all\ ps < .05$)。また、「育児の困難さ」に関しては、出生体重の主効果、サポートの不十分さの主効果、および交互作用が有意であった ($all\ ps < .05$)。

上記の分析から、「育児による不自由さ」に関しては、仮説 2b が、「育児の困難さ」に関しては、仮説 1 および仮説 2b が支持された。以上の結果から、サポートの知覚は低出生体重児の母親の育児負担感に対して緩衝効果を持つと考えられた。

謝辞：本研究は科研費 (23330249) の助成を受けたものである。

表 1 育児による不自由さ・育児の困難さを被説明変数、出生体重とサポートの不十分さを説明変数にした階層的重回帰分析の結果

説明変数	育児による不自由さ			育児の困難さ		
	I	II	III	I	II	III
過去の出産経験	-.14	-.18*	-.18*	-.10	-.17†	-.16†
児の出生体重		.08	.09*		-.30**	-.29**
サポートの不十分さ		.48**	.49**		.36**	.37***
児の出生体重 × サポートの不十分さ			-.18*			-.19*
R^2	.02	.25**	.28**	.00	.22**	.26**
ΔR^2		.23**	.03*		.22**	.04*